

育児期女性の夫婦間コミュニケーションと 配偶者の家事育児分担との関連

江 上 園 子

現在、未就学児を持つ父親の家事育児時間は少しずつ増加しつつあると言われているが、相変わらず、多くの家庭では妻が家事育児の大部分を担っている。このような状況下で子どもを持つ男性の家事育児の分担の高さと関連する要因を明らかにするため、家族社会学を中心とする先行研究によっていくつかの仮説が提唱されており、それらの仮説の中のそれぞれの要因が家庭責任における夫の分担を促しうることがわかっている。しかし従来の仮説に共通する問題として、妻から夫への日常的な夫婦間コミュニケーションの様態を取り上げていない点が挙げられよう。日常的な夫婦間のコミュニケーションは臨床的な意味でも夫婦にとって重要な要素であり、家事育児に関連するやりとりも日常的な夫婦間コミュニケーションに含まれる。そこで本研究では、従来から示唆されている仮説にかかわる変数を統制したうえでも、妻の日常的な夫婦間コミュニケーションのあり方が夫の家事育児分担と関連しているのか、検証した。その結果、妻の夫婦間コミュニケーションの中でも「相手の気持ちを読み取り合わせる」受動的なコミュニケーションが夫の家事育児分担の低さと関連し、「自分の意思や考えを表明する」能動的なコミュニケーションが夫の家事育児分担の高さと関連していた。よって、妻側の意思を明白に伝える積極的な姿勢が夫の家庭参画においても重要であるという示唆を得ることができた。

キーワード：妻の夫婦間コミュニケーション・夫の家事分担・夫の育児分担

1. 問題と目的

1-1. 子育て期にある夫婦の家事育児分担

「イクメン」や「カジメン」という用語が社会に認知されて久しい。実際に総務省統計局（2022）の「令和3年社会生活基本調査」によると、5年前の調査と比較して子育て期にある夫の家事時間は13分の増加、育児時間は16分の増加が見られる。徐々にではあるが、日本社会でも子育て期にある夫の家事育児遂行は増えつつあると言えるだろう。しかし家事関連時間として全体を算出すると夫が1時間54分であることに對し妻は7時間28分であり、子育てやそれに伴う家事関連業務に時間や労力が要求される時期の男女の家事育児時間には、未だに大きな差があると言わざるを得ない。国立社会保障・人口問題研究所（2022）の「第16回出生動向基本調査」からは、第一子出産後も就業を継続する女性の比率がこの5年間で5割台から7割まで上昇していると報告されているが、夫との家事育児分担はそれに伴い連動しているわけではない。この状況下でさえ、「日常的に家事育児を分担する」夫（妻は正規職）は全体の4割程度であるとされ、これは6割の男性が家事育児を負担していないか、していても「手伝い」程度であるということの意味している。夫の育児休業利用（第一子出産後で3歳までの期間でかつ妻が正規職を継続した場合のデータ）も1.7%から6.3%まで「大きく」増加したと触れられているが、もともとの値が低い点や政府の立てた目標には程遠いという点も否定できまい。したがって、社会的な要請としても、学術的な観点からも、父親の家事育児分担の促進は重要なテーマである。実際、父親の家事育児分担に関連する要因について明らかにするべく、国内外において多くの研究が行われてきた。

1-2. 夫の家事育児分担にかかわる仮説

夫の家事と育児の分担はどのような状況下であれば高いのだろうか。この問いについて、主に家族社会学の分野で多くの検討がなされてきた。これまで提唱されてきた仮説について、夫の家事育児分担の高さと関連する要因をその種類によって大まかに以下の2つの流れに整理し6つの仮説（酒井 2007）を挙げる。

まずは、夫婦や家族、それをとりまく外部の存在が有する資源やその逆のコストに関するものである。具体的には夫婦がそれぞれに持つ属性や夫婦としての特徴などの変数の影響が見込まれ、社会経済的地位（SES）や勤務（生産労働）時間等が含まれる。また、子どもの数や夫婦が個人として持つ資源からなる力関係なども当てはまる。仮説としては、夫婦が持つ子どもの総数や末子年

齢など、子育てに要する労力の大きさが夫の家事育児分担を促すという「ニーズ仮説」、夫と妻との年収差や学歴の差などで妻が高いほど夫は家事育児を遂行するという「相対的資源仮説」、夫婦のうち時間に余裕がある方が家事育児を多く分担するという「時間的余裕仮説」、夫婦の他に家事や育児を分担してくれる親族や外部サポートがあれば夫の家事育児分担は低いとする「代替資源仮説」などがある。ただし松田 (2006) など、「ニーズ仮説」と「代替資源仮説」を合わせ「家事・育児の量仮説」というように呼称しているものもあり、必ずしも上記に挙げた仮説が共通認識とは限らない。

次に、夫婦が持つ心理的な変数に関する仮説も挙げられよう。よく取り上げられるものが、夫婦の抱く性別役割分業観やジェンダー観である。いわゆる伝統的な「男性は仕事・女性は家庭」という考え方に代表されるような、性別によって役割を割り当てるような信念であり、これを「イデオロギー仮説」とも呼ぶ。そして夫婦が抱く夫婦関係満足度や結婚満足感もここに含まれ、「情緒的關係仮説」と称されるものもある。その他、心理的な変数として考えられるものは石井クンツ (2013) でも複数紹介されており、例えば父親としてのアイデンティティ (父親役割に対する重要感) やジェネラティビティ (次世代育成に関する価値観)、父親の持つ子育てスキルや子育てに求める基準などがある。

このように、夫の家事・育児の遂行にかかわって多くの要因や仮説が提唱されているが、本研究では酒井 (2007) が提示した6つの仮説を取り上げて変数を設定したい。これは、前者の流れにある「ニーズ仮説」「相対的資源仮説」「時間的余裕仮説」「代替資源仮説」は我が国においても比較的中心的に取り上げられてきた要因であるとともに、そのいずれもが夫の家事育児分担に一定の影響を与えているからである (順に加藤・石井クンツ・牧野・土谷 1998, Ishii-Kuntz & Coltrane 1992a, Ishii-Kuntz, Makino, Kato, & Tsuchiya 2004, 平井 2019 など)。一方で後者の流れにある「イデオロギー仮説」では文化的な背景の違いや時代の変遷もあるためか結果は不安定であり (例えば Ishii-Kuntz & Coltrane 1992a, 稲葉 2005)、文化圏や社会を考慮したうえで時代と共に結果をアップデートしていくことも重要である。「情緒的關係仮説」においては因果関係が議論の分かれるところであるが、相関関係は従来我が国において複数の研究で認められている (例えば末盛・石原 1998, 久保 2017) ため、これらにかかわる変数も現在の日本で新たにデータとして取得する必要があるだろう。

1-3. 妻の夫婦間コミュニケーション

夫の家事育児分担の高さと関連する要因として、これまで代表的な6つの仮

説を提示してきた。ただし、これらの仮説に欠けているものとして、当事者のパートナーである女性たちの「動き」や日常的な夫婦間でのやりとり等が挙げられよう。家事育児分担において妻からの何らかの動き、意思表示や働きかけとして検討されているものとしては“Maternal gatekeeping”（妻が夫の家事育児行動を制限・制御しようとする信念と行動の集合体）（Allen & Hawkins 1999, 金子・濱口 2020）や夫婦ペアレンティング調整（他方の親の子育て関与に対する抑制行動と促進行動）（加藤・黒澤・神谷 2014）などがある。これらはいずれも家事育児という側面における変数であり、実際に、中川（2009）やIshii-Kuntz（2003）によると、妻側からの直接的な働きかけが夫の家事育児参加やその協力を高めるという結果も提示されている。それに加えて、妻側が夫側を「褒めて」家事育児分担を促す（中川 2021）という結果や夫の気持ちや状況をうまく「察して」自分を「コントロールして感謝する」という「子育て」の風潮も一般的に見られるところだろう。

しかしながら、これらは総じて家事育児にかかわる働きかけに限定されたかわりや動きとも理解できる。さらに言うならば、臨床的な意味でも夫婦の家庭生活においてより包括的で日常的な夫婦間コミュニケーションも含めた分析・検討が必要だろう。Benjamin & Sullivan（1999）でも、日常的な夫婦間コミュニケーションが家事育児分担交渉にも影響する可能性が示唆されている。なぜなら、夫婦間における家事育児の分担交渉は毎日の生活の一部であり、日常的な夫婦間コミュニケーションの中に埋め込まれているからだ（Buchau, Schober, & Becker 2021）。もちろん日本でも夫婦間における日常的なコミュニケーションについて検討した研究は散見され、例えば平山・柏木（2004）では、妻は夫に対して日常的にポジティブなコミュニケーション（共感や接近）を多く用いているとされている。しかし、日常的な夫婦間コミュニケーションを中核的な変数として取り上げた研究の中で、夫の家事育児分担との関連性を問うたものは少なくとも我が国では目にしない。

そこで本研究では、妻の夫に対する日常的な夫婦間コミュニケーションに着目し、夫の家事育児分担を左右する可能性が見いだされるかどうか検証することとした。その際、妻側が率直なコミュニケーション（Komter 1989）やネガティブなコミュニケーション（Carlson, Miller, & Rudd 2020）を日常的に取っている場合に、夫側が「重い腰」をあげて動くようになる可能性があるという指摘を鑑み、夫婦間コミュニケーションの行動面やスキル面について測定できる夫婦間コミュニケーション・スキル関連の尺度と、コミュニケーションの質や態度・内容を問う夫婦間コミュニケーション・スタイル関連の尺度を用いることとした。

1-4. 本研究の目的

本研究は以下のように目的を設定した。酒井(2007)が整理した6つの仮説に含まれる変数を統制しても、夫婦間における妻の日常的なコミュニケーションが夫の家事育児分担に作用する可能性はあるか、検証するというものである。このために、本研究では3歳～5歳児を持つ配偶者のいる女性を対象に、質問紙調査を行うこととした。一般的に、就学前の子育てがもっとも労力や時間を要する。よって、本研究では、少なくとも一人の幼児を子育てしている女性を対象とした。もう1点、家事と育児は同じ家庭内の労働ではあっても分担において関連する要因などが異なる(Ishii-Kuntz & Coltrane 1992)ため、別の変数として捉える必要があるだろう。したがって、夫が分担する家事と育児を切り分けて検討する。

2. 方法

2-1. 調査手続き

インターネットリサーチ会社(株式会社GMOリサーチ)に依頼し、無記名でのアンケート調査を2022年12月に行った。その際には、分析において必要なサンプル数の確保や就業形態の偏りの防止から、サンプルが500名程度(うちフルタイム勤務の女性とパートタイム勤務の女性の数が担保される形で)になるように収集を依頼した。また、調査に先立って著者の所属する大学内の研究倫理審査委員会からの承認を得た。

2-2. 調査対象者

3歳～5歳の子どもならびに配偶者と同居する核家族世帯の女性520名(平均年齢は36.2歳、標準偏差は4.56)であった。なお、すべての女性が株式会社GMOリサーチのモニター登録をしている。調査対象者の居住地域は三大都市圏が63.2%、それ以外が36%であった。就業形態は専業主婦が106名、パートタイム勤務が207名、フルタイム勤務が209名であった。教育歴は、中学校卒業が6名、高等学校卒業が111名、専門学校あるいは短大卒業が144名、大学卒業が242名、大学院修了(修士・博士)が19名であった。総務省(2020)の「国勢調査」によると本研究の対象者と同世代の女性では大卒・大学院卒者が全体の36%であるため、本研究対象者の教育歴はそれに比べて若干高いものとなっている。妻単独の年収については表3に記載した。配偶者である夫の平均年齢は38.2歳で標準偏差は5.52であった。就業形態は専業主夫が5名、パートタイム勤務が5名、フルタイム勤務が512名であった。夫の教育歴は、中学

校卒業が18名，高等学校卒業が122名，専門学校あるいは短大卒業が86名，大学卒業が245名，大学院修了（修士・博士）が51名であった。夫単独の年収については妻と同様に表3に記載した。世帯年収の平均は750万円，標準偏差が540万円であった。これは厚生労働省（2020）の「国民生活基礎調査」で得られた平均世帯年収：746万円と同程度のものであり，本研究における協力者の家庭はおおむね標準的な世帯年収に属する。

2-3. 調査項目

- ・ 夫婦それぞれの年収や教育歴・就業形態や労働時間：配偶者と本人のそれぞれについて，年収と教育歴，就業形態と週当たりの労働時間について問うた。専業主婦であっても不労所得や投資などで年収を得ている場合も散見されたことから，年収については「夫の年収－妻の年収」を「相対的資源仮説」に含まれる変数として使用し，配偶者と本人との週当たりの労働時間を「時間的余裕仮説」に含まれる変数として想定した。
- ・ 子どもの数・性別及び年齢：夫婦の子どもの数とすべての子どもの性別，年齢を問うた。この中で，子どもの数を「ニーズ仮説」にかかわるものとして使用した。
- ・ 諸井（1996）「夫婦関係満足度」尺度6項目5件法：配偶者との関係について当てはまるかどうかを，「まったくあてはまらない：1」～「ぴったりあてはまる：5」から一つ選択させた。先述した「情緒的關係仮説」に含まれる変数として想定した。これは単純に異性としての愛情や信頼の度合いを問うものではない。夫婦がそれぞれの役割や家庭での協同を意識し家族成員としての夫婦関係をどのように感じているかについて問うものであり，育児期の夫婦として重要な要素である（例えば神谷 2013）。項目としては「私と配偶者の関係は，非常に安定している」「配偶者との関係によって，私は幸福である」などがある。夫婦の関係性を問う尺度については夫婦間の相関が高く（伊藤・相良・池田 2006），妻の夫婦関係満足度と夫の育児分担との関連が報告されている（Schober 2012）。
- ・ 江上（2005，2007）「『母性愛』信奉傾向」尺度10項目5件法：各項目についてどのように考えるか，「ぜんぜんそう思わない：1」～「その通りだと思う：5」から一つ選択させた。性別役割分業意識に基づいた母親役割を信奉する程度を測定するものであり，「イデオロギー仮説」に含まれる変数として想定した。本研究では直接的に夫に問わないが，夫と妻の性別役割分業意識は関連しつつ（Greenstein 1996），妻のものが夫の家事育児分担に作用する（中川 2010）という。項目は「育児は女性に向いている仕事であるから，す

るのが自然である」「わが子のためなら、自分を犠牲にすることができるのが母親である」などがある。

- ・「夫婦間コミュニケーション・スキル」尺度15項目5件法：配偶者に対する普段の夫婦間コミュニケーション行動についての傾向を「いつもそうでない：1～いつもそうだ：5」から一つ選択させた。堀毛（1994）では恋愛関係や夫婦関係で使用される全般的な対人コミュニケーション（言語・非言語）における基本スキルを測定するものとされ、「記号化」「解説」「統制」の3つのスキルから構成される。なお、本尺度は石・桂田（2006）によって育児期の夫婦においても有用であることが示されている。項目は因子分析結果（表1）に示した。
- ・「夫婦間コミュニケーション・スタイル」尺度20項目4件法：配偶者への日常的な夫婦間コミュニケーション態度についてその頻度を「まったくない：1」～「よくある：4」から一つ選択させた。夫婦が日常的にお互いに対して取りがちなコミュニケーション・スタイルを問うものである。平山・柏木（2001）は「威圧」「共感」「依存・接近」「無視・回避」の4つの態度から構成されている。なお、本尺度は柏井（2014）によって結婚年数に関係なく使用できることが示されている。項目は因子分析結果（表2）に示した。
- ・家事育児分担の割合（%）：家事と育児それぞれにおいて、分担の割合を「自分」「夫」「その他」（親族や年長の子ども・外部サービスなど夫婦以外の存在すべて）で100%になるように算出させた。家事と育児それぞれで、「その他」を「代替資源仮説」に関連する変数つまり家事と育児それぞれの協力資源として扱い、「夫」の家事育児分担割合を従属変数とした。

3. 結果

3-1. 主成分分析ならびに因子分析

本研究で用いた尺度すべてにおいて、主成分分析ならびに因子分析を行った。「母性愛」信奉傾向尺度（江上 2005, 2007）と夫婦関係満足度尺度（諸井 1996）に関しては、先行研究に倣って次元性を想定し主成分分析を行った後、信頼性係数を算出した。その結果、「母性愛」信奉傾向尺度も夫婦関係満足度尺度も次元性が確認された。「母性愛」信奉傾向尺度は、主成分抽出後の累積平方和が59.2%であったとともに、すべての項目の成分の値が.50以上であり、信頼性係数も Cronbach α =.92であったことから10項目の値を合算して尺度得点とした。夫婦関係満足度尺度は主成分抽出後の累積平方和が82.6%であり、すべての項目の成分の値が.85以上、信頼性係数も Cronbach α =.96であった

表1 夫婦間コミュニケーション・スキル尺度因子分析結果
(重みづけなし最小二乗法・バリマックス回転)

項目名	I	II	共通性
3.自分の気持ちや感情をコントロールしながらつきあう	.71	.12	.52
4.会話をうまく進める	.69	.38	.62
5.話をしている相手の気持ちのちょっとした変化を感じ取る	.68	.32	.56
14.相手が自分をどう思っているか読み取る	.63	.29	.48
6.自分を抑えて相手にあわせる	.62	-.06	.39
2.相手のしぐさから気持ちを読み取る	.60	.33	.47
8.言葉がなくても相手の言いたいことがなんとなくわかる	.59	.36	.48
15.相手の言うことが気に入らなくてもそれを態度に出さない	.58	-.10	.34
11.嘘をつかれても見破ることができる	.48	.38	.37
7.感情を素直にあらわす	.08	.81	.66
13.自分の気持ちを表情や目にあらわす	.13	.71	.52
9.気持ちを隠そうとしても表にあらわれる	.18	.60	.39
12.言わないつもりでいることをつい口に出す	-.01	.56	.32
1.自分の気持ちを正確に相手に伝える	.30	.54	.38
10.身ぶりや手ぶりをうまく使って表現する	.39	.52	.42
平方和	3.79	3.12	
寄与率(%)	25.28	20.80	

表2 夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度因子分析結果
(重みづけなし最小二乗法・バリマックス回転)

項目名	I	II	共通性
15.嬉しいことがあると、真っ先に相手に報告する	.81	-.11	.66
20.会話がはずむように感情を豊かに表す	.76	-.01	.58
6.相手に元気がないとき優しい言葉をかける	.75	-.15	.59
14.相手の立場に共感しながら、誠実に耳を傾ける	.74	-.11	.57
2.相手の悩みごとの相談に対して、親身になっていっしょに考える	.74	-.10	.55
3.あなた自身の悩み・迷いごとがあると、相手に相談する	.73	.06	.54
18.相手がおしゃれをしたとき、気づいてほめる	.68	-.01	.47
19.相手に心を開いて内面的な突っ込んだ話をする	.68	.16	.49
10.相手に相談されると、有益で参考になる意見を言う	.53	.20	.32
11.会話が途切れるとあなたの方から話題を提供する	.53	.09	.29
7.重要なことの決定は、相手の意見に従う	.52	.03	.27
9.相手より一段上に立って小ばかにした受け答えをする	-.07	.78	.62
5.相手の話の内容が気に入らないとすぐ怒る	-.02	.75	.57
13.相手が話しているのに、「要するに」と言って結論をせかす	.02	.64	.41
1.日常生活に必要な要件を命令口調で言う	-.08	.57	.33
17.相手が心情を訴えても、まともに取り合わない	-.11	.54	.31
8.他のことをしながらうわの空で相手の話を聞く	.18	.54	.32
4.相手の話にいい加減な相づちをうつ	.14	.50	.27
平方和	5.27	2.88	
寄与率(%)	29.26	15.99	

ことから6項目の値を合算した。

次に、夫婦間コミュニケーション・スキル尺度と夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度について、因子分析を行った結果を表1と表2に示した。因子スクリープロットの固有値における減衰状況や因子寄与率、各因子に含まれる項目内容などを考慮した結果、それぞれ元の尺度とは異なる因子構造となった。夫婦間コミュニケーション・スキル尺度は、相手の様子を観察し自分のコミュニケーションのあり方を相手に合わせられる「受動的スキル」と自分の意思や感情を率直に相手に表現できる「能動的スキル」との二因子に分かれた。夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度は、相手に共感して寄り添ったり自分に起きた嬉しい出来事を相手に報告したりする「ポジティブなスタイル」と日常生活に必要な要件を命令口調で伝えたり相手の話を上の空で聞いたりするなどの「ネガティブなスタイル」との二因子に分かれた。2尺度の下位因子それぞれの信頼性係数については以下、順に示す。「受動的スキル」はCronbach $\alpha = .87$, 「能動的スキル」はCronbach $\alpha = .81$, 「ポジティブなスタイル」はCronbach $\alpha = .91$, 「ネガティブなスタイル」はCronbach $\alpha = .81$ であり、下位因子すべての信頼性が高いことがわかった。よって、それぞれに含まれる項目を合算して各下位尺度得点とした。分析に用いた変数や尺度得点の平均値(SD)は表3に示した。国立社会保障・人口問題研究所(2020)の「第6回全

表3 各変数及び尺度得点の基礎統計量

変数名/統計量	平均値	標準偏差	範囲
妻の週当たり労働時間	18.55(時間)	16.17(時間)	0-100(時間)
夫の週当たり労働時間	37.90(時間)	21.17(時間)	0-122(時間)
妻の年取額	202(万円)	316(万円)	0-4000万円
夫の年取額	523(万円)	330(万円)	0-5000万円
子どもの数	1.97(人)	0.73(人)	1-4(人)
家事協力資源	0.66(%)	3.38(%)	0-50(%)
育児協力資源	1.08(%)	4.75(%)	0-50(%)
夫の家事分担率	17.87(%)	17.24(%)	0-90(%)
夫の育児分担率	23.49(%)	16.30(%)	0-90(%)
受動的スキル	29.68	5.80	9-45
能動的スキル	20.00	4.05	6-30
ポジティブなスタイル	29.05	6.22	11-44
ネガティブなスタイル	14.86	3.76	7-28
夫婦関係満足度	19.77	5.75	6-30
「母性愛」信奉傾向尺度	28.02	8.34	10-50

「国家家庭動向調査」によると、全国の対象者における夫の家事・育児分担の平均はそれぞれ16.8%・20.4%となっており、家事より育児の方が多く含むことも含め本研究の対象者の夫の分担割合とそれほど変わらないこともわかった。

3-2. 相関分析

妻の夫婦間コミュニケーションに関する変数が夫の家事分担率・育児分担率と関連があるかどうか確認するため、また夫婦間コミュニケーションにかかわる変数同士や夫の家事分担と育児分担に関連が見られるか調べるために相関分析を行い、その結果を表4に示した。表4より、夫の家事分担率と関連があると認められたものが「能動的スキル」、「ポジティブなスタイル」、「ネガティブなスタイル」であり、いずれも正の相関関係にあることがわかった。次に、夫の育児分担率に関連があると認められたものは「能動的スキル」、「ポジティブなスタイル」のみであり、いずれも正の相関関係にあることがわかった。夫婦間コミュニケーション変数同士の間にも相関関係が見られるが、いずれも中程度か、それ以下の相関係数であった。一方で夫の家事分担率と育児分担率の間には、高い正の相関関係が認められた。

表4 相関分析表

	受動スキル	能動スキル	ポジスタ	ネガスタ	夫家事分担	夫育児分担
受動スキル	1	.489***	.354***	-.144***	-.013	.041
能動スキル		1	.392***	.017	.173***	.187***
ポジスタ			1	.014	.200***	.228***
ネガスタ				1	.096*	.054
夫家事分担					1	.664***
夫育児分担						1

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

3-3. 階層的重回帰分析

6つの仮説にかかわる変数と夫婦間コミュニケーションに関する変数を説明変数、夫の家事分担率と育児分担率をそれぞれ目的変数とする強制投入法による階層的重回帰分析を行った。その際、ステップ1では夫婦が持つ基本的な属性変数の「夫婦の年取差（夫－妻）」、「夫の週当たり労働時間」と「妻の週当たり労働時間」、「子どもの数」、「夫婦以外の家事または育児協力資源」を入れ、ステップ2では心理的な変数である「夫婦関係満足度」、「『母性愛』信奉傾向」を入れ、最後のステップ3で4つの夫婦間コミュニケーション変数（「受動的ス

表5 階層的重回帰分析の結果 (夫の家事分担率)

説明変数(β)/ステップ	I	II	III
年収差(夫-妻)	-.278***	-.293***	-.292***
週当たり労働時間(夫)	-.139**	-.116**	-.121**
週当たり労働時間(妻)	.152***	.135**	.143***
子どもの数	.013	.013	.009
家事協力資源	-.030	-.029	-.028
夫婦関係満足度		.230***	.176**
「母性愛」信奉傾向		-.100*	-.085*
受動的スキル			-.154**
能動的スキル			.179***
ポジティブなスタイル			.074
ネガティブなスタイル			.071 ⁺
R^2	.133***	.197***	.239***
ΔR^2		.064***	.042***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表6 階層的重回帰分析の結果 (夫の育児分担率)

説明変数(β)/ステップ	I	II	III
年収差(夫-妻)	-.233***	-.251***	-.252***
週当たり労働時間(夫)	-.129**	-.103*	-.106*
週当たり労働時間(妻)	.139**	.118**	.127**
子どもの数	-.063	-.063	-.067 ⁺
育児協力資源	-.035	-.029	-.030
夫婦関係満足度		.271***	.203***
「母性愛」信奉傾向		-.122**	-.120**
受動的スキル			-.093 ⁺
能動的スキル			.164***
ポジティブなスタイル			.063
ネガティブなスタイル			.046
R^2	.104***	.194***	.222***
ΔR^2		.090***	.027**

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

キル」「能動的スキル」「ポジティブなスタイル」「ネガティブなスタイル」を投入した。夫の家事分担率における分析結果を表5、育児分担率における分析結果を表6に示す。本研究の分析はすべてIBM SPSS Statistics Ver.28を用いた。なお、ダービン・ワトソン比（Durbin-Watson ratio）の値（家事：1.98、育児：1.99）より、いずれの分析でも残差がランダムであり、得られたデータによる重回帰分析が有効である。また、表4より夫婦間コミュニケーション変数同士の相関係数が低いことから、多重共線性は見られない。

表5より、説明率の増分がステップ3において有意である（ $p<.001$ ）ことから、夫の家事分担率はステップ3の結果を採用することとした。この結果より、「夫婦の年収差（夫－妻）」、「夫の週当たり労働時間」と「妻の週当たり労働時間」、「子どもの数」、「夫婦以外の家事協力資源」、さらには「夫婦関係満足度」、「『母性愛』信奉傾向」を統制したうへでも「受動的スキル」（ $p<.01$ ）と「能動的スキル」（ $p<.001$ ）が夫の家事分担率を予測していることが認められたうへ、「ネガティブなスタイル」（ $p<.10$ ）も夫の家事分担率を予測する傾向にあることがわかった。具体的には、「受動的スキル」が高いと夫の家事分担率は低くなり、逆に「能動的スキル」が高いと夫の家事分担率も高くなることがわかった。さらに、「ネガティブなスタイル」の高さも夫の家事分担率の高さと関連している可能性が示唆された。

表6より、説明率の増分がステップ3において有意である（ $p<.01$ ）ことから、夫の育児分担率もステップ3の結果を採用することとした。この結果より、「夫婦の年収差（夫－妻）」、「夫の週当たり労働時間」と「妻の週当たり労働時間」、「子どもの数」、「夫婦以外の育児協力資源」、さらには「夫婦関係満足度」、「『母性愛』信奉傾向」を統制したうへでも「能動的スキル」（ $p<.001$ ）が夫の育児分担率を予測していることが認められたうへ、「受動的スキル」（ $p<.10$ ）も夫の育児分担率を予測する傾向にあることがわかった。具体的には、「能動的スキル」が高いと夫の育児分担率も高くなることがわかった。そして、逆に「受動的スキル」の高さは夫の育児分担率の低さと関連している可能性が示唆された。

4. 考察

4-1. 妻の夫婦間コミュニケーションスキルとスタイルとの関連

本研究の目的は、酒井（2007）が整理した6つの仮説「ニーズ仮説」「相対的資源仮説」「代替資源仮説」「時間的余裕仮説」「イデオロギー仮説」「情緒的仮説」に含まれる変数を統制してもなお、妻の日常的な夫婦間コミュニケーション

ンが夫の家事育児分担に作用する可能性を検証することであった。ただし記述統計や相関分析の結果より、妻の夫婦間コミュニケーションにかかわる変数同士についても興味深い関係性が見られたことから、まずはこの点について考察していきたい。表3より、夫婦間コミュニケーション関連の各尺度の平均値を項目数で割った結果、受動的スキルと能動スキル(5件法)はそれぞれ3.30, 3.33, ポジティブなスタイルとネガティブなスタイル(4件法)はそれぞれ2.64, 2.12であった。夫婦間コミュニケーション・スキルという面で、受動的なものも能動的なものも平均的に持ち合わせており、スキル間の差は無いと考えられる。コミュニケーション・スタイルで差の検定は行っていないが、ポジティブなスタイルの方が若干高い。これは平山・柏木(2001)の研究とも類似しており、妻の夫に対するコミュニケーションはポジティブなスタイルの場合が多いという。しかしながら、平山・柏木(2001)と比較して対象者の年齢層の違いゆえか時代の流れゆえか、本研究の対象女性はネガティブなスタイルもある程度有しているということが示された。

また、表4に示した夫婦間コミュニケーション変数同士の連関の中では、受動的スキルと能動的スキルの正の相関関係が興味深いものであった。これらの下位尺度は一見反対のもののように見えるが、いずれも「スキル」であるために、両方併せ持つ場合にもっとも夫婦間コミュニケーション・スキルが高いという解釈も可能である。ただ、夫の家事育児分担を促す可能性としてのあらわれ方が異なるのであろう。そしてこれらの「スキル」が高い場合、夫婦間コミュニケーション・スタイルとしてはポジティブなスタイルを取りがちであることもうかがえた。高い夫婦間コミュニケーション・スキルを持っている妻の場合、夫に対しても余裕のある夫婦間コミュニケーション・スタイルを保っているのかもしれない。ただし夫の家事育児分担と夫婦間コミュニケーション・スタイルとの関連は強くない。コミュニケーションにおける単純な正負のあり方ではなく、もう一步踏み込んだスキルの重要性が指摘されよう。

4-2. 夫婦間コミュニケーションと家事育児分担との関連

次に、本研究の目的に対応した重回帰分析の結果を中心に考察していく。まず、家事においては、能動的スキルと夫の分担率とに正の関連、受動的スキルと夫の分担率とに負の関連があることが明らかとなった。これについては、受動的スキルを主に用いる妻は、夫の様子をうかがいながら夫に合わせてコミュニケーションしていることが想定され、特に家事は「見えない家事」の問題(藤田 2009)としても指摘される通り、気が付いた妻の方が行ってしまう可能性があるからではないかと推測される。逆に自分の意思を率直に伝える能動的ス

キルを多用する妻については、日々、夫に自分の意思・要望をストレートに伝えている可能性がある。そのため、その意思表明を通して家事分担が促される (Komter 1989) 可能性があるのではないだろうか。もう一つ興味深い結果として、ネガティブな夫婦間コミュニケーション・スタイルと夫の家事分担比率の高さとの関連が示唆されたことである。これについて Carlson, Miller & Rudd (2020) の解釈を援用すれば、妻側のネガティブな夫婦間コミュニケーションは、夫にとって「なるべくやりたくない」家事を無理にでも行わせる一助となるという面のあらわれであると推察される。一方で、ポジティブな夫婦間コミュニケーション・スタイルとの関連は認められなかった。子どもとかがかわる際の夫の姿を褒めるなどの“Maternal gatekeeping”の下位尺度である「促進」や夫婦間ペアレンティング調整の促進行為については、夫の育児関与との正の関連性が認められている (金子・濱口 2020, 加藤・黒澤・神谷 2014) が、それと近いものであるポジティブな夫婦間コミュニケーション・スタイルは少なくとも本研究では無相関であった。夫の家事育児に関する具体的で直接的な促進行為と全般的なポジティブなスタイルという尺度の内容の違いによるのか、検討が必要だろう。

次に、育児においては能動的スキルと夫の分担率とに正の関連、受動的スキルと夫の分担率とに負の関連があることが明らかとなった。やはり、日常的に夫に自分の意思や気持ちを正確に伝えている妻は、おそらく育児でもかかわり方や気づきや協力を促していることが示唆されよう。家事と同様の結果であるが、妻側が夫に合わせていく受動的スキルは妻が先に動いてしまうことに繋がるため、結果的に育児分担でも効果的ではない結果を招くとも考えられる。家事と異なる結果としては、ネガティブな夫婦間コミュニケーションと育児分担比率との関連が一切見られなかったことであろう。ネガティブな夫婦間のやりとりは、夫へある種の危機感を抱かせて家事分担を促進する可能性はあっても (Carlson, Miller, & Rudd, 2020), 育児には該当しないということである。多くの先行研究と同様に (例えば久保 2017), 本研究でも夫の家事分担と育児分担には正の相関関係がある。しかし、石井クンツ (2013) で触れられている通り、家事に比べて育児の方が「報酬」という面で得られるものが多く、夫にとっては参加・協力のハードルが低い。そのため妻がネガティブなかかわりをせずとも、あるいはそれと無関係に、子どもにかかわりたい父親は既にかかわっているのかもしれない。

以上の結果を総括すると、能動的スキルの有効性が指摘されよう。石・桂田 (2006) では因子構造が異なるまでも本研究と同様の夫婦間コミュニケーション・スキル尺度を用いており、本研究での能動的スキルと尺度内容が同様であ

る自分の意図や考えを相手に正確に伝える「記号化」が夫婦間でのスムーズなコミュニケーションを促し、それが最終的には育児不安を低下させる意味でも重要であると述べている。一方で、「母親の人格的成熟性」を示すという「統制」が育児不安の軽減においても重要であると解釈しているが、本研究でそれと近い尺度の「受動的スキル」は少なくとも夫の家事育児分担促進においては逆効果となる可能性があることも興味深い。これは、近年、母親向け雑誌に見られる一般的な「夫を褒めて育てて家庭参画させる」という風潮に一石を投じることにもつながるだろう。

4-3. 結論

本研究の結果から得られた結論をまとめると、以下のようになる。まずは、6つの仮説に関連する変数を統制してもなお、妻から夫への日常的な夫婦間コミュニケーションと夫の家事育児分担比率の関連性の強さが認められたということである。そして、より詳細には、雰囲気や相手の様子から「察する」、もしくは自分をコントロールして相手に「合わせる」受動的スキルは夫の家事育児分担において逆効果となりうることもわかった。反対に、自分の意思や希望などを「表明する」能動的スキルが夫の家事育児分担比率を増加させる可能性が示唆された。さらには、ネガティブなスタイルも夫の家事育児分担において一部に関連する傾向が見られた。夫と妻の社会経済的地位や家族の状況、さらには妻の心理的な変数などによってのみ夫の家事育児分担は左右されるわけではないという結論を示せた点、妻の夫に対する日常的なコミュニケーション、殊に妻側の意思を明白に伝える積極的な姿勢が夫の家庭参画においても重要であるという点を一部示唆できたことが本研究の意義として挙げられる。

4-4. 課題

最後に、本研究の課題について3点述べる。まずは夫の家事育児分担について取り上げつつも、実際には夫を調査対象にしていない点である。妻のネガティブな夫婦間コミュニケーションの影響力を示したCarlson, Miller, & Rudd (2020) はペアデータで検討されたものであり、夫が認知する「妻の夫婦間コミュニケーションのあり方」を取り上げている。妻は夫の家事育児遂行を低く見積もり、夫はその逆で自分の家事育児遂行を多く見積もるという報告(Kamo 2000)からも、今後は夫婦ペアデータで追試していく必要があるだろう。

次に、本研究では妻の夫婦間コミュニケーションと夫の家事育児分担との因果関係の同定が不可能な点も挙げられる。本研究とは扱う変数が違うが、Carlson, Pilkauskas, McLanahan, & Brooks-Gunn (2011) やLavner, Karney,

& Bradbury (2016) のように固定効果回帰モデルや交差遅延効果モデル等での分析も課題として掲げておきたい。

以上の2点に加えて、発展的な課題としては夫婦間コミュニケーションを問題としながら質問紙調査のみである点が挙げられよう。Flick (2018) はデータ収集におけるトライアングレーション（方法的複眼）の重要性を指摘している。例えばZamir, Gewirtz, Labella, DeGarmo, & Snyder (2018) のように自己報告式の質問紙調査と夫婦間のコミュニケーションの観察データを組み合わせることで、夫婦間のコミュニケーションの実態により迫っていけると考えられる。これらの検討を通して、夫の家事育児分担に対する妻の夫婦間コミュニケーションの影響力と有効性をさらに確かな形で明らかにできるだろう。

（えがみ そのこ 白梅学園大学）

謝辞：本研究にご協力下さいました520名の方に心より感謝申し上げます。また、修正の段階で懇切丁寧にご指導下さいました査読の先生方に厚く御礼申し上げます。なお、本研究の途中経過をWork & Family研究会にて、ならびに全体を心理科学研究会・ジェンダー分科会にて口頭発表しました。コメント下さいました皆様、誠にありがとうございました。

[引用文献]

- Allen, S. M., & Hawkins, A. J. 1999 Maternal Gatekeeping: Mothers' beliefs and behaviors that inhibit greater father involvement in family work. *Journal of Marriage and the Family*, 61, 199-212.
- Benjamin, O. & Sullivan, O. 1999 Relational resources, gender consciousness and possibilities of change in marital relationships. *The Sociological Review*, 47, 794-820.
- Buchau, S., Schober, P. S., & Becker, D. 2021 Couples' communication behaviour and the gender division of family work across the transition to parenthood. *Journal of Family Issues*, 44, 909-929.
- Carlson, D. L., Miller, A. J., & Rudd, S. 2020 Division of housework, communication, and couples' relationship satisfaction. *Sociological Research for a Dynamic World*, 6, 1-17.
- Carlson, M. J., Pilkauskas, N. V., McLanahan, S. S., & Brooks-Gunn, J. 2011 Couples as partners and parents over children's early years. *Journal of Marriage and*

- Family, 73, 317-334.
- 江上園子 2005「幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全」『発達心理学研究』, 16, 122-134
- 江上園子 2007「「母性愛」信奉傾向が幼児への感情表出に及ぼす影響——職業要因との関連——」『心理学研究』, 78, 148-156
- Flick, U. 2018 *Doing triangulation and mixed methods*. SAGE Publications Ltd.
- 藤田朋子 2009「無償労働のなかの「見えない」家事——夫婦の家事分担調査からの検証」『女性学』, 16, 101-122
- Greenstein, T. N. 1996 Husbands' participation in domestic labor: Interactive effects of wives' and husbands' gender ideologies. *Journal of Marriage and the Family*, 58, 585-595.
- 平井太規 2019「家族形成期の共働き世帯における夫の家事・育児分担とその規定要因」『統計学』, (116), 13-25
- 平山順子・柏木恵子 2001「中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？」『発達心理学研究』, 12, 216-227
- 平山順子・柏木恵子 2004「中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連」『発達心理学研究』, 15, 89-100
- 堀毛一也 1994「恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル」『実験社会心理学研究』, 34, 116-128
- 稲葉昭英 2005「家族と少子化」『社会学評論』, 56, 38-54
- Ishii-Kuntz, M. 2003 Balancing fatherhood and work: Emergence of diverse masculinities in contemporary Japan. In Roberson, J. & Suzuki, N. (Eds.), *Men and masculinities in Japan* (pp. 198-216). Routledge.
- 石井クンツ昌子 2013『「育メン」現象の社会学—育児・子育て参加への希望を叶えるために—』ミネルヴァ書房
- Ishii-Kuntz, M. & Coltrane, S. 1992 Predicting the sharing of household labor: Are parenting and housework distinct? *Sociological Perspectives*, 35, 629-647.
- Ishii-Kuntz, M., Makino, K., Kato, K., & Tsuchiya, M. 2004 Japanese fathers of preschoolers and their involvement in child care. *Journal of Marriage and Family*, 66, 779-791.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 2006「職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響：妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討」『発達心理学研究』, 17, 62-72
- 神谷哲司 2013「育児期夫婦のペア・データによる家庭内役割観タイプへの検討：役割観の異同の類型化と夫婦の関係性の視点から」『発達心理学研究』, 24, 238-249

- Kamo, Y. 2000 "He said, she said" : Assessing discrepancies in husbands' and Wives' reports on the division of household labor. *Social Science Research*, 29, 459-476.
- 金子楓・濱口佳和 2020「母親のゲートキーピング尺度日本語版の作成と心理性・妥当性の検討」『教育心理学研究』, 68, 339-350
- 粕井みづほ 2014「夫婦間コミュニケーションの特徴と結婚年数による違い」『日本家政学会誌』, 65, 50-56
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 1998「父親の育児参加を規定する要因：どのような条件が父親の育児参加を進めるのか」『家庭教育研究所紀要』, (20), 38-47
- 加藤道代・黒澤泰・神谷哲司 2014「夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討」『心理学研究』, 84, 566-575
- 国立社会保障・人口問題研究所 2020「第6回全国家庭動向調査」<https://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ6/Mhoukoku/Mhoukoku.pdf> (2023年6月17日最終アクセス)
- 国立社会保障・人口問題研究所 2022「第16回出生動向基本調査」<https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/JNFS16gaiyo.pdf> (2023年3月14日最終アクセス)
- Komter, A. 1989 Hidden power in marriage. *Gender & Society*, 3, 187-216.
- 厚生労働省 2020「2019年国民生活基礎調査」<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/14.pdf> (2023年3月14日最終アクセス)
- 久保桂子 2017「共働き夫婦の家事・育児分担の実態」『日本労働研究雑誌』, (689), 17-27
- Lavner, J. A., Karney, B. R., & Bradbury, T. N. 2016 Does couples' communication predict marital satisfaction, or does marital satisfaction predict communication? *Journal of Marriage and Family*, 78, 680-694.
- 松田茂樹 2006「近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化」『季刊家計経済研究』, (71), 45-54
- 諸井克英 1996「家庭内労働の分担における衡平性の知覚」『家族心理学研究』, 10, 15-30
- 中川まり 2009「共働き夫婦における妻の働きかけと夫の育児・家事参加」『お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学論叢』, 12, 305-313
- 中川まり 2010「子育て期における母親の家庭責任意識と父親の育児・家事参加」『家族社会学研究』, 22, 201-212
- 中川まり 2021『ジェンダー化された家庭内役割の平等化と母親ゲートキーピング』

風間書房

- 酒井計史 2007「父子の平日接触時間の日韓比較——接触時間の長さの影響と接触時間の規定要因——」『国立女性教育会館研究ジャーナル』, (11), 11-22
- Schober, P. S. 2012 Paternal child care and relationship quality: A longitudinal analysis of reciprocal associations. *Journal of Marriage and Family*, 74, 281–296.
- 石曉玲・桂田恵美子 2006「夫婦間コミュニケーションの視点からの育児不安の検討——乳幼児を持つ母親を対象とした実証的研究」『母性衛生』, 47, 222-229
- 総務省統計局 2020「国勢調査」<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003450581> (2023年6月17日最終アクセス)
- 総務省統計局 2022「令和3年社会生活基本調査」<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/pdf/gaiyoua.pdf> (2023年3月14日最終アクセス)
- 末盛慶・石原邦雄 1998「夫の家事遂行と妻の夫婦関係満足感—NSFH (National Survey of Families and Households) を用いた日米比較—」『人口問題研究』, 54, 39-55
- Zamir, O., Gewirtz, A. H., Labella, M., DeGarmo, D. S., & Snyder, J. 2018 Experiential avoidance, dyadic interaction and relationship quality in the lives of veterans and their partners. *Journal of Family Issues*, 39, 1191-1212.

(2023年9月24日掲載決定)

The relationship between wives' communication and husbands' sharing of housework and childcare duties

EGAMI Sonoko

(Shiraume Gakuen University)

Today, the amount of time fathers of preschool children in Japan spend on housework and childcare is gradually increasing. However, in many households, wives still do most of the housework and childcare. To clarify the factors that increase the share of housework and childcare taken on by men, several hypotheses have been proposed in the field of family sociology, those studies found that each factor in the hypotheses might promote husbands' share of the family duties. However, conventional hypotheses do not address the daily communication of couples. Daily communication between a husband and wife is also an important factor for couples in clinical psychology, and negotiations related to housework and childcare are included in their daily communications. Therefore, in this study, even after controlling for variables related to hypotheses suggested the past, there is a possibility of the effect of wives' daily communication on husbands' division of housework and childcare. Among the wives' communication, passive communication has been associated with a low share of housework and childcare by husbands. By contrast, wives' active communication is associated with a higher share of housework and childcare among husbands. This suggests that an assertive attitude of clearly conveying the wife's intentions is also important for the husband's participation in the family duties.

Keywords : wives' communication, housework sharing of husbands, childcare sharing of husbands